

☒ 話すこと
 ☐ 書くこと

☐ 個に応じた教材の作成や指導の充実
☒ パフォーマンステストでの活用

☒ 授業での活用
☐ 課外活動での活用

☐ 家庭学習での活用
実践の
ポイント

言語活動・AIをミックスした新たな学習プロセスの構築と生徒によるAI活用場面の選択

実証概要

<校数>2校(中学校2校) <人数>905名

<学年>中学校:第1、2、3学年 <アプリ等>WorldClassroom(HelloWorld株式会社)

<AI機能について>①音読機能 ②やり取り課題 ③プレゼンテーション機能 ④ライティング機能 (⑤国際交流)

言語活動では、インプットとアウトプットを繰り返しながら、言語活動後にフィードバックを行うことが非常に重要であるが、一斉授業での1on1の指導は非常に困難である。AIの活用により、教師の役割が変わり、様々なニーズを抱える生徒への指導の個別化につなげることを目的に、最も効果的な学習プロセスを実証校とともに検証した。

AIの効果的な活用方法や取組 (AI英語モデル校事業)

●新たな学習プロセスの構築

教師による内容面、AIによる言語面のフィードバックを中心に、新たな学習プロセスを構築した。

- ①やり取り：教師からの題材の提示→ALT⇄SS→SS⇄AI→SS⇄SS→中間指導→SS⇄SS
 ②ライティング：話したことをノートに記述→AIからのフィードバック→分析後、修正しノートに記述
 ③音読：概要と意味の把握→音読機能→内容が把握できているか確認
 ④パフォーマンステスト：①②の活動→修正→振り返りとフィードバックによる自己調整



●AI活用場面の選択

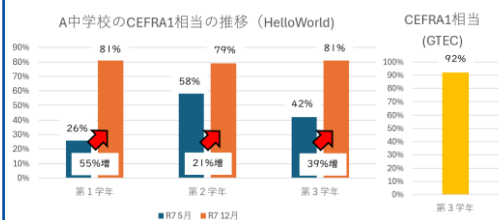
AIの活用を通じて、生徒にどのような力を身に付けることを目標としているのかを明確にした。導入当初は、やり取りの壁打ちとして、全生徒がAIを使用していたが、生徒自身がAIの活用場面を選択し、習熟度に合わせて、表示される英文を隠してやり取りをする、話す対象(AI、ALT・JTE、クラスメイト)を生徒自身が選ぶなどの工夫をしたことにより、生徒自身が何が必要なのかを考えるようになり、学習を自己調整しながら個別最適な学習に資するものとなった。

実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①生徒の英語力の変化

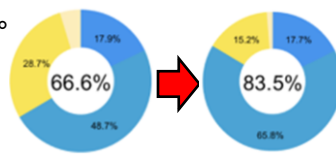
※A中学校の場合

活用前と後で優位な差が確認できた。



②生徒の関心・意欲の変化

9割以上の生徒でAIアプリが全ての技能に役立っていると回答したが、特に「書く」力が身に付いたと回答した割合が増加した。



③教師の指導の変化

教師主導型から生徒に委ねる教師・生徒主導のバランスの取れた指導形態に変わった。

また、生徒の学習のつまずきに合わせた個別最適な学習により、英語が苦手な生徒に対してのより細やかな支援が可能となるなど、教師の指導に明らかな変化が見られた。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取組 (AI英語活用リーダー事業)

●AI英語活用リーダー育成のための取組

AI英語活用リーダーの育成に向け、指定校の教員とともに、実践→先進校視察(5校)→日々の授業実践→公開授業(3回)→有識者による指導講話(3回)を通じて、お互いの実践を深めた。また、Microsoft Teams上での情報共有、視察の報告、汎用性のある取組の共有を行うことで、次年度リーダー全員が本市のAI活用の中核者として活躍できるようにした。

本市の外国語教育拠点校での公開授業や実践発表、視察の受け入れ(2都市)を行うことで、取組を広く発信することができたとともに、教員の指導力の向上につながった。次期学習指導要領を見据え、今年度得た知見をさらに深め、市全体の取組として普及できるよう、情報発信と研究に努めたい。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取組 (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

●本年度の成果と課題、次年度に向けた取組

【成果】CEFR A1相当の数値が指定校両校で20%ほど上昇した。それは生徒自身がAIの使用場面を選択することで、学習を自己調整しながら個別最適な学習を行ったこと、また、適切な学習プロセスと、AIや教師からの効果的な中間指導とフィードバックの成果と考えられる。

【課題】教師が何のためにAIを使用し、子どもにどのような力を身に付けさせたいのかを考えて授業設計を行い、活用にあたっては、AIを使うこと自体が目的とならないように留意する。

【次年度に向けて】次期学習指導要領を見据え、AIと言語活動がベストミックスとなるよう、今年度得た知見と実践をAI英語活用リーダーを中心に普及していきたい。